

台風が近づいていた9月8日、学習センターで「濱野詩帆オーボエリサイタル」を聞いた。鎌倉市教育委員会傘下の鎌倉生涯学習推進委員会が主宰する、年一回の「藝大の仲間シリーズ」の2019年度のリサイタル。事前申し込みが必要だが無料。といっても演奏者は東京藝大卒のプロの音楽家である。オーボエ奏者の濱野詩帆さんはドイツのマンハイムを本拠とする。ピアノの稲生亜砂紀さんは、この「藝大の仲間シリーズ」で既にチェロとクラリネットの伴奏、更にピアノ独奏をしており、今回が4回目の登場とのこと。約200名の来場者はクラシックコンサートの通例で老々男女ばかり。

第1部の最初は、バロック期ドイツのテレマンによる「12のファンタジー」から第7番。祭典的な華やかさを感じた。無伴奏のためか、演奏者の息遣いがよく聞こえた。オーボエは吹く穴が極めて小さく、先端口径4mm、吹いている間は息を出しきれないため、吹いていない瞬間に息を吐かねばならない、という説明が後からあり、「なるほど」と思った。

次は、おなじみバッハの「主よ、人の望みの喜びよ」。もともとカンタータの中の一曲だが、バッハの曲はどんな楽器で演奏しても聴きごたえがある。

今年は、クララ・シューマンの生誕200年とのことで、主宰者から特にクララの曲を演奏するように依頼したようだ。まずは夫のロベルト・シューマンの「3つのロマンス」から第1曲。僕は、よりポピュラーなイ長調の第2曲を期待していたけれど、第1曲はイ短調だが曲想は似ていて悪くない。濱野さんによれば、「ロベルトの曲は壊れやすそうで、クララの曲は温かい感じがする」という。9月7日のNHK-FMの「クラシックの迷宮」が、やはりクララ・シューマン特集だったが、片山杜秀は、「ロベルトは超ロマンチスト、クララはベートーベン等先達の曲を勉強・演奏していて、彼女自身の作曲もがちりちりとしている」と言っていた。続いて演奏されたのは、クララの「3つのロマンス」3曲全曲。第2曲はロベルトの影響を感じさせたが、第3曲は確かに、より温かみがあった。

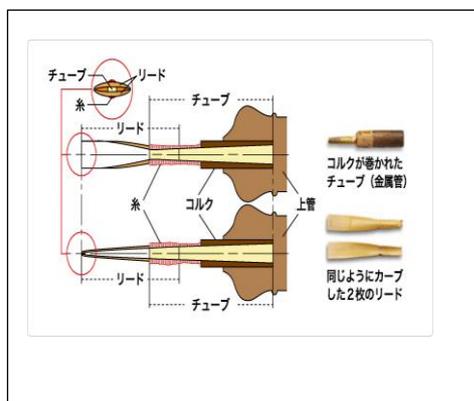


濱野詩帆さん 稲生亜砂紀さん

濱野さんからは更にロベルトとクララとの恋愛・結婚、ロベルトの没後、クララが多くの子供を養うために活発に演奏活動を続けたことなどが紹介された。また楽譜に秘められた暗号の話もあった。すでに「クラシックの迷宮」で、「ロベルトのピアノ協奏曲の出だし、ドシララがドイツ語ではCHAAであり、Clara 相当のイタリア名はChiara だから。」と聞いていたが、この日はピアノで「トロイメライ」の出だし、ミファ〜ミラドファファにはクララとロベルトの愛称が組み込まれているという。CF〜EFACFFだが、FEがロベルトの愛称の頭文字で、CとAではさんだ、というややこしい暗号。

ドレミ	ド	レ	ミ	ファ	ソ	ラ	シ
英語	C	D	E	F	G	A	B
日本語	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	イ	ロ
ドイツ語	C	D	E	F	G	A	H(Bではない)

第2部に入る前にオーボエの説明があった。見たところクラリネットに似ているが、抑えるキーが多くて複雑。リードはファゴットと共にダブルである。マウスピースと、葦、リードを削る道具を「どうぞご自由にご覧ください」と見せて頂いた。「演奏には、これらを沢山持参しなければならないので大変」とのこと。「練習時間より、リード削りと管への巻き付けに時間を取られる。」とは以前、N響の首席オーボエ奏者だった茂木大輔の著書で読んだことがあったが、今回聞いて驚いたことは「葦は南仏から1kg単位で買うが半分は使えなくて捨ててしまう。」ということだった。



中学の音楽の授業で「オーボエはチャルメラの親戚」と教わった。「チャルメラもダブルリードだろうか？」と演奏者に質問する訳にもいかず、帰宅後調べたら、やはりダブルリードということが分かった。チャルメラのソバ屋さんは、ソバと汁の仕込みより、リード削りに時間を取られたのだろうか？

第2部の冒頭はチャイコフスキーの「白鳥の湖」で一番有名な「情景」。もともとオーボエではじまる管弦楽である。濱野さんによれば、オーボエは作曲家が管弦楽曲の中で歌わせたい気にさせる楽器だとのこと。その一例として、ブラームスのヴァイオリン協奏曲第2楽章の冒頭部をCDとの合奏で聴かせてくれた。聴きなれた曲だが、「ヴァイオリンの前の導入部でオーボエがこんなに長く演奏されているのだ」と改めて実感すると共に、いつもより更にしっとりとした感銘を受けた。

もう一つ質問したいことがあったが、演奏者から先に説明があった。「演奏会で、オーケストラの最初の音合わせは、なぜオーボエに従うのか」ということ。「一番音程が安定しているのがオーボエとの説と、オーボエは、他の楽器と違い、その場で急に調音できないからとの説がある」そうだ。

次はラヴェルの「クーブランの墓」全4曲中の3曲。もとはピアノ曲で、ラヴェル自身が管弦楽用に編曲したものを、更にオーボエとピアノのために編曲したもの。僕は、管弦楽版はアンドレ・クリュイタンス指揮、パリ音楽院管弦楽団のCDを愛聴しているが、オーボエ版は初めて聴く。演奏者は、「第一部ではドイツ人作曲家のものばかりで、ドイツ語のように長く伸びる曲風ですね。フランスの曲はフランス語みたいにもっと小刻みで、お洒落です。」と紹介。

最後は、これも今回の主宰者の依頼でプログラムに入れたという、ハース(Pavel Haas)の「オーボエとピアノのための組曲」。ハースはユダヤ人でチェコはモラヴィアの出身。同郷のヤナーチェクの弟子とのこと。アウシュヴィッツの収容所で1944年に刑死。この曲を主宰者は「収容所内で書かれた」と紹介したが、作曲は1939年、ナチスに連行されるのが1941年だから、収容所内の作曲ではなかろう。「ピアノ演奏方法でも革新的」との紹介があったが、確かに第1曲の出だしのピアノの轟音には驚いた。「ナチスの圧力への不安」に満ちているとの説明もあった。初めて、この曲を聴いた僕の勝手な印象：第1曲 不安、第2曲 やすらぎ、第3曲 悲しみと不安、第4曲 静けさと叫び、また不安。あるいは「怒り」も秘めていたのかもしれない。

今回はバロックから20世紀音楽まで堪能させて頂いた。



テレマン バッハ シューマン夫妻 チャイコフスキー ラヴェル ハース

蛇足：僕の好きな、その他のオーボエの曲は：モーツァルト オーボエ四重奏曲、マルチェッロ オーボエ協奏曲、レブルン オーボエ協奏曲第1番。

以上